

# 職業達成の構造の男女比較

——1985-2015 年 SSM 調査の結果を用いた計量分析——

東京大学 白川俊之

## 1 背景と目的

女性を対象とした階層研究は、既存の研究枠組に対する Acker (1973) の指摘を嚆矢とし、階層の測定単位にかかわる論争を経て、今日に至るまで着実な成果を積み重ねてきた。階層研究の最もオーソドックスな問題関心といえる世代間の地位の開放性に関する問題については、「社会階層と社会移動全国調査」(SSM 調査)で初めて女性がその対象とされた第4回調査以来、各時点の調査データを用いて、男性との比較を中心に実証的な分析がすすめられている。そうした分析によって、女性は男性よりも到達地位と出身地位の連関が弱く、出身家庭の影響からより開放的であることが明らかにされた(橋本 1989, 1997; 今田 1990)。今世紀に入ってからおこなわれた調査の結果を利用した分析でも、類似した知見が得られている(三輪 2015)。

本報告は出身 - 到達の連関について上記のような男女差が見られることを念頭に置いたうえで、このトピックにかかわり、現段階では研究が不足している以下の分析課題に焦点を当てる。

- 第1に父親と母親の影響を同時に考慮した場合、出身 - 到達の格差の見え方に男女でどのような特徴があるかを明らかにすること
- 第2に女性における出身 - 到達格差の長期的なトレンドを粗描すること
- 第3に教育達成やライフサイクル要因を独立変数に加え、職業達成の過程で男女がさらされている機会格差をより総合的な視座から明らかにすること

女性は男性である父親とは職業の分布が異なり、その影響で到達地位においては父親とは異なる階層へと移動しやすいことが、これまでにも指摘されている。女性の地位達成が男性と比較して実質的に親世代の影響を受けにくいといえるかどうかを見極めるためには、男女(父と娘)の職業分布のちがいによってもたらされる構造的な移動の背後で、母親の地位がどのように関与しているかを調べることが不可欠と考えられる。また、移動表分析は出身 - 到達格差を切り出すための標準的なツールだが、多数の共変量を扱うことには不向きで、とくにデータの蓄積が少ない女性についてコーホートによる変化や出身地位とは独立した他の要因の影響を見ようとすれば、多くの技術的な困難をともなう。第2、第3の課題は、これらの問題を克服しようとする意図を含めて設定している。

## 2 方法

分析に使用するのは1985年から2015年までの4回分のSSM調査のデータである。ただし、母親の職業を聞いているという条件が満たされないため、男性に関しては1995年以降のデータのみを使用する。回答者の現職を従属変数、両親の職業を独立変数とし、専門(男性が多く占める古典的専門と女性が比較的多いその他の専門を区別)、管理、自営、販売、事務、技能工、下層マニュアル、サービス、農業の職業10カテゴリを双方に適用して、分析をおこなう。分析に耐えるだけの大きさの標本を確保するために、母親の職業地位については無職のカテゴリを設けている。最初に、母職×父職×現職のクロス表を男女別に検討し、出身 - 到達格差の基本的なパターンと性別によるちがいを確認する。その後、他の共変量の影響を考慮した拡張的な分析に着手する。コーホート間の変化や教育達成の影響については、理論にもとづく仮説的予測との適否を問うことも予定している。

## 謝辞

本研究はJSPS 科研費特別推進研究事業(課題番号25000001)に伴う成果の一つであり、本データ使用にあたっては2015年SSM調査データ管理委員会の許可を得た。